

内川地区周辺における学生のボランティア活動支援、及び地域社会を意識する人材の育成に関する調査研究

指導教員；北陸学院大学人間総合学部 専任講師 田引俊和

参加学生：川島浩照・北野光葉・倉元晴香・高橋 遼・谷合洸洋
寺川和宏・藤野兼司・女川万里奈・山本昌宜

1. 調査研究成果要約（200文字以内）

本研究では、前半部分で大学生が参加するボランティア活動の本質について文献研究などにより情報を集めゼミ内で協議を重ねた。そのうえで後半部分では、大学周辺にある高齢者、障害児・者の福祉施設 10 か所に対するインタビュー調査を実施して大学生を中心としたボランティア活動の状況、および地域における高齢者、障害児・者施設の役割と意義についてまとめた。

2. 調査研究の背景と目的

本学の人間総合学部には社会福祉学科では、介護福祉士、社会福祉士、精神保健福祉士といった福祉専門職の養成を行っており、関連して1年次から継続的なボランティア活動を推奨して積極的に社会に貢献できる意識の醸成を目指している。

ただ、学生が参加するボランティア活動においてはいくつかの課題もみられる。たとえば、その内容や地域がかなり限定的であり、必ずしも広く地域社会に貢献できるものとなっていない、あるいは参加に際しても自己の関心とは関係なく大学教職員側からの働きかけにより決定しているなど消極的な印象もある。とりわけ、活動地域については大学周辺にある福祉関連機関・施設に対する意識は十分なものではないように思われる。

また、1年次から継続的に行なうボランティア活動ではあるが、学生がその行き先を選択、判断するための材料が乏しいという問題もある他、興味・関心を持ってはいるが先方に連絡することをためらってしまい結局何も活動しなかったというような意見も聞かれる。このため、活動の機会を活かし、かつ、成果をより意義のあるものにするために何らかの工夫が求められている。

これら背景に鑑み、本調査研究では、地域社会を意識する人材の育成や地域社会における大学の活用・貢献の一つとしての大学生のボランティア活動のあり方を検討することを目的とする。

今回の研究では特に、これまで共に歴史を重ねた大学周辺の高齢者、障害児・者のための福祉施設等を調査研究の対象とした。ボランティア活動へのニーズ、あるいは学生の関わりが許される活動範囲を把握し、次年度以降、本学学生が地域社会を意識しながら身近なところでボランティア活動に参加できるような情報を整備することを目指す。同時に、地域における高齢者、障害児・者の福祉施設の役割と意義についてもあらためて考えてみることにした。

3. 調査研究の内容

以下のとおり調査研究に取り組んだ。

① 調査研究の前半部分「事前準備」：

大学生が参加するボランティア活動の本質について文献研究などにより情報を集めゼミ内で協議を重ねた。また、金沢市内、および内川地区周辺の高齢者、障害児・者福祉施設等の状況と特徴を把握した。後半で行うインタビュー調査の質問項目も検討した。

② 調査研究の後半部分「インタビュー調査」：

大学周辺にある高齢者、障害児・者の福祉施設 10 か所に対して、大学生のボランティア活動に関するインタビュー調査を実施した。主なインタビュー項目は大学生を中心としたボランティア活動の状況、および地域における高齢者、障害児・者施設の役割と意義で構成され、半構造化面接により実施した。

③ 「課題検討とまとめ」：

インタビュー調査で得られた情報をもとにして大学がある内川地区周辺のボランティア活動情報をまとめ、対象施設と本学学生が相互に連携し合える部分の検討を行った。併せて、高齢者、障害児・者の福祉施設等の意味や役割について考察した。

また、本調査研究の最終的な形として、本学学生向けに内川地区を中心としたボランティア情報冊子の作成に取り組んだ。次年度以降のボランティア活動に活用することを目指して必要な項目、情報、デザインなど学生自らの視点で検討を行った。

4. 調査研究の成果

(1) ボランティア活動の概要

全国社会福祉協議会の調査によると現在把握されているボランティアの人数（ボランティア団体に所属するボランティア人数と、個人で活動するボランティアの人数の合計）は、約739万人となっている。

（表1）調査が始まった昭和55年から平成17年までの25年間で約4.6倍となっている。

活動分野については、「高齢者の福祉活動」「障害者の福祉活動」の2分野が特に目立っている。（図1）また、活動している人の年齢層では、10代、20代の若い世代よりも、50代、60代、70代のボランティア参加が多くなっている。（図2）

表1：ボランティアの推移

	ボランティア 団体数	団体所属 ボランティア数	個人 ボランティア数	ボランティア 総数
1980（昭和55）年	16,162	1,552,577	50,875	1,603,452
1984（昭和59）年	24,658	2,411,588	144,020	2,555,608
1985（昭和60）年	28,462	2,699,725	119,749	2,819,474
1986（昭和61）年	28,636	2,728,409	147,403	2,875,812
1987（昭和62）年	32,871	2,705,995	182,290	2,888,285
1988（昭和63）年	43,620	3,221,253	164,542	3,385,795
1989（平成元）年	46,928	3,787,802	114,138	3,901,940
1991（平成3）年	48,787	4,007,768	102,862	4,110,630
1992（平成4）年	53,069	4,148,941	126,682	4,275,623
1993（平成5）年	56,100	4,530,032	159,349	4,689,381
1994（平成6）年	60,738	4,823,261	174,235	4,997,496
1995（平成7）年	63,406	4,801,118	249,987	5,051,105
1996（平成8）年	69,281	5,033,045	280,501	5,313,546
1997（平成9）年	79,025	5,121,169	336,742	5,457,911
1998（平成10）年	83,416	5,877,770	341,149	6,218,919
1999（平成11）年	90,689	6,593,967	364,504	6,958,471
2000（平成12）年	95,741	6,758,381	362,569	7,120,950
2001（平成13）年	97,648	6,833,719	385,428	7,219,147
2002（平成14）年	101,972	7,028,923	367,694	7,396,617
2003（平成15）年	118,820	7,406,247	385,365	7,791,612
2004（平成16）年	123,300	7,407,379	386,588	7,793,967
2005（平成17）年	123,926	7,009,543	376,085	7,385,628

全国ボランティア活動実態調査，平成22年，全社協．をもとに作成

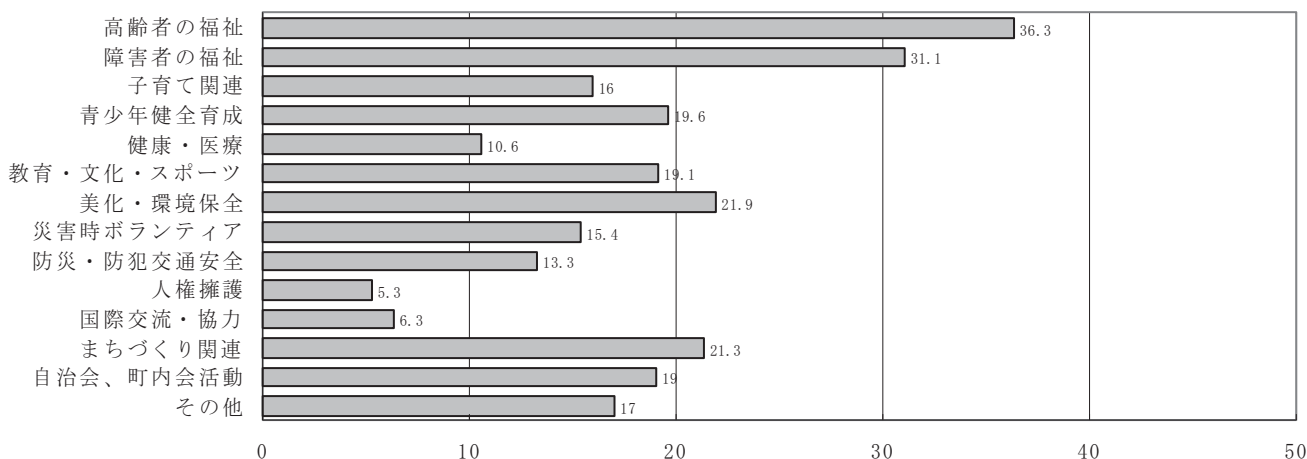


図1：ボランティアの活動分野（複数回答，単位％）

全国ボランティア活動実態調査，平成22年，全社協．をもとに作成

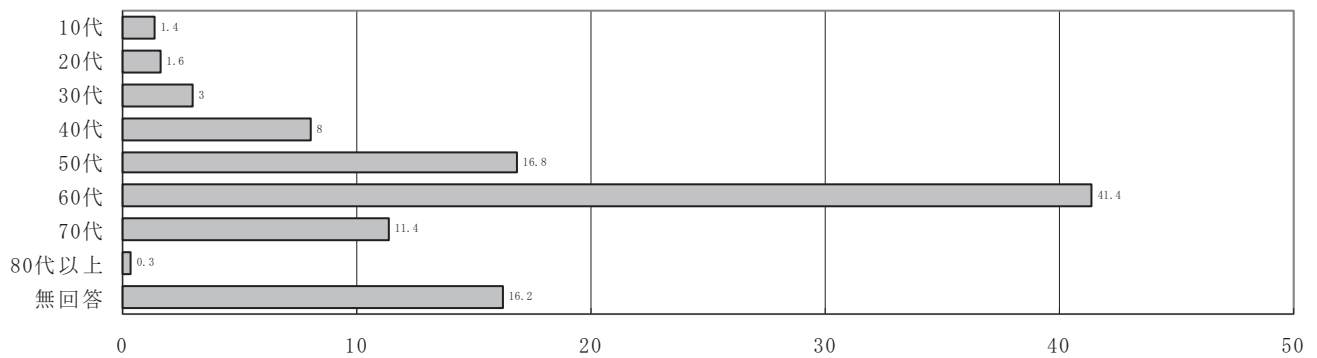


図2：活動メンバーの年齢層（団体・組織が回答，単位%）

全国ボランティア活動実態調査，平成22年，全社協，をもとに作成

ボランティア活動を通して得られたと思うことについては「多くの仲間ができた」がどの年齢層においても上位に位置していた。このほか，本調査研究が意識している大学生の10代，20代についてみると，「活動自体が楽しい」「新しい知識や技術を習得することができた」「自分の人格形成や成長にプラスになっている」「社会に対する見方が広がった」「ボランティア活動が必要不可欠なものとの実感」という意見がみられた。若い世代にとってはボランティア活動が自己の成長や知識などの獲得に役立っていると考えられる。（表2）

表2：ボランティア活動で得られたと思うこと（複数回答，単位%）

	活動自体が楽しい	息抜きやストレス解消になる	心身ともに健康であり続けることができている	新しい自分を発見できた	新しい知識や技術を習得することができた	自分の人格形成や成長にプラスになっている	生きがいを感じることができた	社会に対する見方が広がった	多くの仲間ができた	地域社会とのつながりをつくることができた	人と協力したり連携する楽しさを知った	自分に自信が持てるようになった	自分の中の偏見や差別意識などが薄らいだ	人との接し方，人間関係が円滑になった	自分の住んでいる町に愛着を感じるようになった	自分が社会や他の人に役に立っていることを実感	自分たちの力で改善できると実感できた	社会や地域に対して問題提起することができた	ボランティア活動が必要不可欠なものとの実感	学校・友人等身近な人から評価された	学校・職場や公的機関から評価された
全体	53.5	22.6	37.9	25.7	45.7	47.7	32.2	36.7	64.0	48.0	41.0	15.9	15.0	34.5	25.0	42.5	18.9	16.4	44.4	24.0	17.5
10代	63.6	18.2	27.3	45.5	63.6	72.7	36.4	63.6	54.5	27.3	54.5	18.2	45.5	54.5	36.4	36.4	27.3	18.2	63.6	18.2	45.5
20代	71.1	45.8	16.9	41.0	65.1	68.7	20.5	42.2	65.1	32.5	51.8	30.1	25.3	44.6	30.1	28.9	15.7	16.9	28.9	27.7	16.9
30代	45.1	24.5	14.7	21.6	39.2	51.0	17.6	39.2	49.0	40.2	33.3	19.6	14.7	20.6	22.5	30.4	23.5	12.7	23.5	13.7	10.8
40代	47.8	26.6	13.0	28.8	54.9	54.3	21.7	39.7	66.8	48.9	36.4	16.8	12.5	26.1	21.7	28.8	17.9	17.4	27.2	20.7	16.3
50代	51.7	25.0	25.7	29.2	49.8	52.7	27.7	36.6	62.1	43.8	38.1	15.3	14.9	30.0	20.3	37.4	14.1	14.9	33.4	21.8	17.6
60代	51.9	20.0	40.2	25.3	45.1	46.4	31.2	38.1	65.4	50.1	41.0	13.6	15.2	36.0	24.7	45.3	19.6	15.2	49.1	24.8	16.9
70代	58.6	20.2	57.4	21.0	38.9	40.7	43.2	32.5	64.6	52.5	44.2	17.1	14.6	39.7	29.8	49.8	21.6	20.6	56.4	26.7	20.6
80代以上	50.9	17.0	67.9	20.8	37.7	35.8	58.5	22.6	66.0	39.6	43.4	15.1	5.7	28.3	22.6	56.6	17.0	13.2	49.1	30.2	11.3

全国ボランティア活動実態調査，平成22年，全社協，をもとに作成

(2) 「ボランティア」のとらえかた

ボランティアや地域社会に関する文献研究とあわせて、ゼミ活動においてボランティアとらえ方について何度か話し合いの機会を持った。そもそもボランティアとはいったい何だろうか、と。

はじめは、「自分が何かしてあげたらボランティア」「他人に関わり何かしてあげること」「相手がよくなることを考えてすることがボランティア」というような意見がみられた。全体的に、「何かをしてあげること」というようなものであった。続く段階では、「一方通行的ではない双方向的なもの」「人間本来のあるべき姿」「相互協力など昔はあたりまえのことだったのでは」「現代社会は自分中心、利益優先、他人に無関心」という意見が出てきて、ボランティアのとらえ方、解釈がとても難しいことに気付かされた。

そして関連する文献を参考にさらに議論を深めて、「自発性」「無償・有償性」「自己成長性」という3つの視点にたどりついた。「自発性」は、ボランティア活動は自らの自由意思で行うものであって、だれかに押しつけられたり強制されたりして行なうものではなく、ボランティアを考える上で最も重要なものだと考えた。「無償性や有償性」についてはしばしば議論の対象となるものである。たとえば、労働の対価として何らかの報酬を受け取ればそれはもうボランティアとはいえない、という考え方がある一方で、交通費や食事代程度の経費や謝礼を受け取ってもボランティアの価値を損なうものではないという意見もみられる。どちらも納得できる意見だといえる。ボランティアは無償がいいのか、有償がいいのかは決まっておらず、活動に取り組む人自身のとらえ方しだいだと考えた。3つ目の「自己成長性」は、活動を通して自分自身が成長したと考えるものであり、金銭的には代えがたい多くの学びや生きるエネルギーを得ることにつながるものである。ボランティア活動をとおして「今まで気づかなかった社会的課題にふれることができ、自分自身の考え方や生き方を変えるきっかけになった」といった自己発見や自己成長を感じることもある。利用者のありがたい一言で、ボランティアが“自分は価値ある存在なのだ”ということを再確認できるといえる。

たび重なる話しあいと関連する文献を調べた結果、ボランティア活動は「人にしてあげる」という利他的ものではなく、自分自身の成長などが得られることも考えると結果的に自分のために行なっているのではないかという方向にまとまってきた。

(3) インタビューの結果

表3：インタビュー調査の結果

インタビューの対象・日時 (地域の高齢・障害福祉施設)	学生のボランティア活動の 可否、内容	学生ボランティアへの期待、 メッセージ	地域における役割・意義 (インタビュー担当学生の考察)
1. 障害者福祉施設 10/14 (木) 16:30-17:30	福祉系大学生だけでなく一般の市民 ボランティアも在籍 ① 作業ボランティア ② クラブ作業ボランティア ③ イベントボランティア	・ボランティア保険の確認 ・利用者さんとの関わり ・いろいろな言葉づかい	学生ボランティアを歓迎してくれている。
2. 高齢者福祉施設 10/18 (月) 16:30-17:00	① 行事の補助 ② 利用者とのコミュニケーション ③ 身体介護以外の補助	・ボランティアを通して介護職関係 を目指すきっかけや確認としてつ ながりやすいと思う。 ・また、就職などに限らずボラン ティアを通してこれからのことにプ ラスにしていだけやすいと思 う。	・家族とのつながりを大切にしており、利用者の家族が誕生会等によく会いに来ている。 ・社会との関係性も大切にしており、お互いが楽しめるように考えられていた。 ・知り合いとの交流の場としてよく考えられていた。
3. 高齢者福祉施設 10/21 (木) 16:00-16:40	① 学習スタッフ ② クラブ活動の補助 ③ 行事の補助 ④ 身体介護以外の補助 ⑤ 余暇支援	・ボランティアは勉強になると思う。施設によって違いもあるためいろいろな施設に行き、多くのボランティアを体験してほしい。学生の間だからこそできることもあるのでこの期間を大切に勉強の一貫としてボランティアに参加してもらいたい。 ・そのため基本的にはどのような形のボランティアも歓迎。そこから提案や、要望があれば相談をして決めていきたい。お互い有意義なものにしたい。	・近年高齢化が進む中で、在宅で生活することが難しくなっている。そのための社会的資源としてこの施設があり、高齢になっても安心し過ごせることを目的としている。 ・そのため、祭りや行事を通して地域に根ざした施設を目指している。 ・施設を創るのは職員や入居者だけでなく、その家族や地域の人々、ボランティアの人達が必要だと考えられており学ぶところが多い。

4. 高齢者福祉施設 10/22 (金) 13:30-14:30	① クラブ活動の補助 ② 身体介護以外の補助 ③ 余暇支援	・若い人を見ていると孫を思い出したり、自分の若い頃を思い出せるので学生のみなさんの「若さ」を期待する。 ・ボランティアでいろいろな経験をして今後の人生の参考にしてほしい。 ・利用者さんと関わり、その背景を感じ取ることによって自分を見直す（成長の）きっかけにしてほしい。	・社会的交流の場（ボランティアの方々に施設利用者のご家族さんが多くいることや、毎日ボランティアの方がいるので顔見知りになり、楽しく話す場になっている）。 ・ボランティアに来る人にとってもデイのような役割をしており、また、お互い家族や友達のようなふれあいの場にもなっている。 ・こちらでのボランティアを長く続けているかたが沢山おり、その長く続く秘訣が、もともとやすらぎホームに家族がお世話になっていた人やボランティアの内容を自分で好きなものを選ぶことだと感じた。 ・利用者さんもボランティアさんも施設側もお互いに持ちつ持たれつの関係で、自然発生的（人の助け合いの心により）にとってもよい関係で楽しくボランティアを行っているように思えた。
5. 障害児福祉施設 10/26 (火) (電話のみ)	日常的には学生ボランティアは受け入れていない。		
6. 障害者福祉施設 10/28 (木) 14:00-15:00	福祉系大学生だけでなく一般の市民ボランティアも参加 ① 作業補助ボランティア ② 行事ボランティア	・何でもとにかくやってみて、分からないことは聞いてほしい。 ・少しでもボランティアに興味があればやってみてほしい。 ・興味を持ってくれること自体嬉しい。ボランティアでも何でも、きっかけを活かしてほしい。	
7. 障害児福祉施設 10/29 (金) 9:30-12:30	① 子どもたちの出迎え ② 一緒に遊ぶ ③ 食事の見守り ※積極的に受け入れているわけではない。	・現場でしか学べないことがたくさんある。 ・子どもたちからも毎日何かを学ぶことができる。	障害がある子どものための福祉施設であるが、積極的に学生ボランティアを受け入れているわけではないようであった。
8. 高齢者福祉施設 11/1 (月) 15:30-16:00	① 日常的な活動補助 ② レク・集いの補助 ③ 行事の補助 ④ 余暇支援（趣味などの披露）	・大学で学んだことと、実際に現場で見るものでは違うこともあると思う。だから、そこで何か感じたことがあれば積極的に発言してもらいたい。 ・利用者の方は施設にいてどうしてもコミュニケーション不足に陥りやすい。職員も対話を心がけているが、ゆっくり会話できる時間は少ないため、ぜひたくさんお話をしてほしい。いろいろな方がいるため、職員にコミュニケーションの注意事項を聴き、そのかわり方を学んでほしい。 ・そして、自主性を持って積極的にボランティアに参加してもらいたい。実習で施設に来るのと自らボランティアで施設に来るのでは、また物の見え方が違ってくると思う。ぜひ自主的に参加してほしい。	・施設は地域に開かれているほうが望ましいという考えで、積極的に地域交流を行っている。 ・たとえば、近くにある内川小中学校と交流が深く、生徒が歌を披露したり工作の作品などを持ってきたりすることもある。 ・利用者の方の作品を披露することもある。 ・職員のみであるが、内川地区の祭りや盆踊りへも参加している。何かあったときに助け合えるように災害時の協定も結んでいる。 ・福祉施設は誰でも気軽に来るといことがないため、利用者の方も職員も全力で地域参加を心がけている。
9. 高齢者福祉施設 11/18 (木) 13:00-13:30	① 利用者さんのお相手 ② 体操、趣味活動の補助 ③ 施設内の清掃補助	・利用者さんたちは若い方と話したり、笑顔を見るのを楽しみにしている。 ・難しいことは考えずに学生のみなさんが楽しんでくれるといいと思う。	・介護保険に基づいて要介護1以上の認定を受けられた方に利用してもらっている。お一人おひとりを大切に、安心して人生を送っていただけるように努めている。 ・親切に接してくれて、なんでも気軽に話せそうな雰囲気があって、学生もボランティアに参加しやすいようであった。

10. 障害者福祉施設 12/17（金）13：30-14：30	① 絵画活動等の補助 ② 機織り活動の補助 ③ 余暇時間の補助	・ 学生ボランティアは大歓迎。 ・ 利用者さんもボランティアの方たちとつながっていくことがうれしいと思う。 ・ 利用者さんを見かけたら学生の方にも声かけなどをしてほしい。 ・ 大学の空き時間などにでもどんどん来てほしい。	・ 地域でやっていきたいという気持ちがあるので、外出するようにしている。 ・ 自分たちもここに普通に生活しているということを発信していきたい。 ・ スタッフも利用者さんも親切で初めての学生もボランティアに行きやすい雰囲気だった。
--	--	---	--

5. 調査研究に基づく提言

本研究では、前半で文献研究によりボランティア活動そのものについて情報を集め、そしてゼミ内で話し合いを行った。そのうえで後半部分では、大学周辺の高齢者、障害児・者の福祉施設における、大学生ボランティアの活動の受け入れ状況について 10 か所に対するインタビュー調査を実施した。それぞれについて次のように提言をまとめた。

(1) ボランティア活動への提言

ボランティア活動は、面倒くさいと思われたり、何のために活動に取り組むのかを理解されなかったりすることも少なくない。しかし、ボランティアをとおして自分自身も成長することができたり生きがいを見つれたりすることもできる。加えて、自ら進んでボランティアに取り組むことにより、現代社会に住む私たちが忘れかけていた助け合いの精神も取り戻すことができる。それを持つ人が増えることで、自然と相互扶助の姿勢が育まれ、人が人を思いやる気持ちにつながっていくと考える。

ボランティアとは、世界を変える「可能性」なのである。自発的にボランティア活動に参加して自分自身の成長や生きるきっかけ、あるいは誰かの明日への希望となり、社会を変える手掛かりになることを期待する。

(2) インタビュー調査結果・地域社会との関わりへの提言

今回インタビューを行った多くの福祉施設で学生のボランティア活動を歓迎してくれていた。また、単に活動の機会を与えられるのではなく、ほとんどの施設では学生の学習の一助、あるいは学生自身の成長なども意識して下さっていた。学生からすれば大変ありがたいことであり、同時に、大学あるいは学生と地域の福祉施設などとの連携の可能性はたくさんあるように感じた。

今年度ゼミで取り組んだ活動の結果は、学内向けのボランティア情報誌にまとめて紹介する予定である。活動を通して得るものは様々だとは思われるが、一人でも多くの学生が何らかの形でボランティアに参加できるように提案したい。

6. 調査研究の自己評価

日常的にボランティアという言葉を使っている。また、学内でもボランティアのチラシ、ポスターをよく見かける。ただ、いままではボランティアそのものについて漠然としかとらえておらず、こんなにもまじめに、時間をかけてボランティアについて考えたことはなかった。

また、地域にある福祉施設の存在もあらためて考えるきっかけになった。今まで福祉施設との関係というと、就職や実習などしか想像できなかったが多くの施設でボランティアを受け入れており、またこんなにも大学生のボランティアを歓迎してくれていることを初めて知った。同時に、すでに多くの市民の方々がボランティアとして活動しているという実態も知ることができた。これらはゼミナール支援事業を通して得ることができた成果であり、評価に値すると考える。次年度はより具体的な形で地域社会との連携を考えていきたい。

謝辞：

最後に、本ゼミナール支援事業の調査研究にご協力いただいた関連施設の皆さまに感謝申し上げます。